

ナショナリスト期エルンスト・ユンガーのドイツ国民像

野上 俊彦

はじめに

本稿は、20世紀ドイツの作家エルンスト・ユンガー（1895-1998）のドイツ国民像の様態を、彼がナショナリストの立場で書いた1925～34年の諸文書¹⁾を主な素材にして明らかにする試みである。1920年代半ばにユンガーは、ドイツ人とオーストリア人と周辺地域のドイツ系住民が合同して新しい強大なドイツ国民となり、世界支配的な「ゲルマン帝国」を樹立するという政治目標を立てた。²⁾ しかしその主体となるドイツ国民を彼がどのような人々（であるべき）と捉えていたのかは判然としない。ユンガーが抱くドイツ国民像はどのようなもので、それはどのような思考の理路を辿って形成されたのか。これが本稿の記述を主導する問いである。

この時期のユンガーのドイツ国民像を直接分析しているのは、管見のかぎりブロイアーの研究に限られる。ヴァイマル期保守革命思潮研究の一環でユ

-
- 1) ユンガーのナショナリスト期が1925年に始まることで研究者の意見はおおむね一致しており、本稿もこの通説に則っているが、それがいつ終わるかについては諸説ある。たとえばブロイアーやヴァイスマンは、1932年の『労働者』のうちに、川合は1930年の『全面動員』のうちに脱ナショナリスト化の端緒を認めている（Stefan Breuer: *Anatomie der konservativen Revolution*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1993, S. 180; Armin Mohler/Karlheinz Weißmann: *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Ein Handbuch*. Graz (Ales) 2006⁶, S. 184; 川合全弘：エルンスト・ユンガーのナショナリズム論 — ナチズム観の特徴とその変遷 [権左武志編著『ドイツ連邦主義の崩壊と再建 — ヴァイマル共和国から戦後ドイツへ』(岩波書店) 2015, 154-183頁] 181頁)。しかし本稿では、ユンガーがナショナリズムを放棄したと確実に言えるのは1934年だと考え、この年までを彼のナショナリスト期に含めることにする。理由は二つある。第一は、ケリングも指摘するように、1930年のナショナリスト的評論『全面動員』が1934年の著作『葉と石』に初出時の形で再録されていること（Timo Kölling: *Leopold Ziegler. Eine Schlüsselfigur im Umkreis des Denkens von Ernst Jünger und Friedrich Georg Jünger*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2008, S. 55)、第二は、ユンガーが既発表作品中のナショナリストの記述を反省し、それらを取り除いた改訂新版を出し始めるのは1934年以降だということである。
 - 2) Ernst Jünger: *Politische Publizistik 1919-1933* [= PP]. Hrsg. von Sven Olaf Berggötz. Stuttgart (Klett-Cotta) 2001, S. 81, 83, 164f., 278. 本書収録文書の一部は邦訳がある〔川合全弘編訳：ユンガー政治評論選（月曜社）2015〕。以下、ユンガーの著書の記述を引用・要約する際は、丸括弧内に略号と頁番号を記し、邦訳書の該当する頁番号を亀甲括弧内に記す。また同一書からの引用・要約が続くときは、略号を省略して頁番号のみ記す。

ンガーのナショナリズムを取り上げたプロイアーは、その分析にあたってまず欧米諸国の国民理解を三類型に大別している。第一は北米圏の国民理解で、現に国家の成員であるという制度的事実を国民帰属の条件として重視する。第二はフランスやイタリアの国民理解で、帰属意志や共同体感情などの主観的要素を重視する。第三はドイツを含む中欧・東欧の国民理解で、言語や文化や人種や性格などの「客観的」とされる要素を重視する。この区分を踏まえてプロイアーは、国民を「血の基準に適ったもの」として捉える点でユンガーが第三類型を出発点としていること、しかしそれに加えて共同体感情のような主観的要素を重視する点で第二類型に近づくことを指摘している。³⁾ この指摘に倣えば、ドイツの血統を持つ人がドイツの国民共同体への参加意志を持つとき、その人はドイツ国民になる、というのがユンガーの考えである。

プロイアーの指摘はおおむね首肯しうるものだが、類型学的関心によって視野が局限されているため、その分析はユンガーのドイツ国民像のいわば表面をなぞるにとどまっている。そもそも国民帰属の認定基準となる血とは何であるのか、それに加えて重視される共同体感情とはどのようなものなのか、それは血の基準とどう関わっている（いない）のか、といった点が問われていないため、結果的に、ユンガーがドイツ国民をどのような人間集団（であるべき）と考えていたかが不明確なままなのである。

以上の問題関心のもと本稿は、ユンガーがドイツ国民に与えた「血の共同体」、「運命共同体」、「性格の共同体」という三つの別名を手がかりにして、その国民像の具体的な内容を考察する。はじめに血と運命の共同体について（第一節）、次に性格の共同体について考察する（第二節）。そこで得られた理解を、ドイツ国民から排除される人々についての語りを参照して確かめ（第三節）、最後に彼のドイツ国民像の梗概を記述する。

1 血と運命の共同体としてのドイツ国民

プロイアーがユンガーのドイツ国民像を血統共同体と見なすのは、ユンガーが国民を「血の基準に適ったもの」（PP, 181）と呼んでいるからである。さしあたりこの表現は、ドイツ系の親のもとに生まれた人々がドイツ国民である、という意味で捉えることができる。実際にユンガーは「私たちは出生を通じて国民の構成員に、つまり出生によって結ばれた者たちの共同体の構成員になる」（127）と述べている。

出生時の国民帰属を認定する二大基準は血統と出生地であるが、ユンガーのドイツ国民論で重点が置かれるのはやはり血統である。人は「父祖の遺産

3) Breuer: Anatomie (Anm. 1), S. 80-83.

すなわち血によって自分の国と結びつけられている」(19; vgl. 125) のであり、血こそは「その謎に満ちた流れの中で国民を結びつける」(36) ものだと彼は言う。端的に言えば、国民は「血の共通性」に立脚した「血の共同体」なのである (332, 127f.; vgl. 162, 181, 190f.)。

他方、出生地については、「聖なる川、恐ろしい山脈、広大な海といった境界」(128) によって国民の生は空間的に区切られる、という曖昧な自然国境論的考えを述べるにとどまる。とはいえこれは、ドイツ系の親のもとであっても自然国境外で生まれた場合は（少なくとも自動的に）ドイツ国民にならない、という自制的判断の根拠となりうる考えであり、他方で現行ドイツ国の外部であっても自然国境内で生まれたドイツ系住民であればドイツ国民に属する、という対外侵略的主張の根拠にもなりうる考えである。

これらの発言をまとめると、ドイツおよびその周辺地においてドイツ系の（父）親のもとに生まれた者がドイツ国民だ、ということになる。帰属意志や共同体感情を国民帰属の条件とするフランス・イタリア型の国民理解と比べると、選択不可能な親の国民帰属に依存するという点で、ユンガーの国民理解は閉鎖的である。ナショナリストにとって人間の政治的団結の決定的基盤は「血の共通性」であって「精神の共通性」ではないという彼の考えを見るとき (332)、この印象はいっそう強まる。

しかし血の共同体についてのユンガーの語りを仔細に見ると、この印象は逆転する。彼にとって国民帰属の最重要条件は命も惜しまず祖国ドイツに奉仕することであって、この条件が満たされれば、ドイツ生まれかどうか、（父）親がドイツ国民であるどうかは重要ではないのである (125)。たとえば彼はライプツィヒ大学の神学教授であった C・R・グレゴリー (1846-1917) を血の共同体の模範的構成員に数え入れているのだが、この人物はもともと血統の点でも国籍の点でもドイツ系ではなかった（フランス系アメリカ人の父とイギリス人の母のもとアメリカで生まれた）。にもかかわらずグレゴリーを血の共同体の模範的構成員とする理由の一つは、彼が熱烈なドイツ愛国者で、第一次世界大戦勃発時68歳の高齢であったにもかかわらず、高い地位と安定した生活を捨てて陸軍志願兵となった（そして戦死した）からなのである。⁴⁾

ユンガーが国民帰属の認定基準として決死の祖国奉仕を重視していることは、血の共同体の理想的なモデルとして、フォークランド沖海戦 (1914年) やユトランド沖海戦 (1916年) で戦死したドイツ海軍の「軍艦乗組員たち」を引き合いに出す点にも窺われる。それらの人々は英艦隊の攻撃を受けた際、

4) Vgl. Ernst Jünger: Caspar René Gregory [= CRG]. In: Die Unvergessenen. Hrsg. von Ernst Jünger. Berlin (Wilhelm Andermann Verlag) 1928, S. 117-131, hier S. 118f. [川合全弘訳：カスパー・ルネ・グレゴリー [『ユンガー政治評論選』(Anm. 2) 27-66頁] 32-34頁]

「総司令官から最下級のボイラー室員まで」一致団結して自艦の沈没回避と戦闘継続に努め、沈没に際しても軍旗を掲げ続け、万歳三唱し軍歌を合唱しながら海中に没したと言われている。⁵⁾ 愛国的戦闘意志によって自我を装甲し、動じることなく危険と死を受け入れたとされるこの兵士集団をユンガーは高く評価し、これを血の共同体の理想像と見ている (PP, 108f., 128, 196, 300f.; vgl. 395f. [75f.])。

しかしそうすると不可解なのは、必ずしもつねにドイツ系の血統というわけではない愛国者集団が、それにもかかわらず血の共同体の模範像と位置づけられることである。ユンガーにとって血とは何なのだろうか。彼は「血の本質を完全に理解するためには、私たちは運命から出発しなければならない」(193)と言う。彼の言う「運命」とは、人間の行動を規定し歴史の進行方向を定める「世界精神」的な力である。⁶⁾ 人間の行動やその集積の結果としての人間の歴史を生み出しているのは個々の人間ではなく、「人間を超えた巨大で強制的な力の潮流」(PP, 45; vgl. 69, 80, 199)たる運命なのである。

運命ならびに血についてのユンガーの考えは三つの定式にまとめられる。

- ①運命の規定を人間に伝える媒質が血である。「運命と血。不可視の力とその伝達物質。前者は後者を通して現われる。[...] 血は運命の形而上学的炎が燃焼させる燃料である」(193f.)。②人間が血を介して運命の規定を把握するのは、思考以前の本能的反応である。運命の力の「伝達媒体は血であって脳ではない」。人間は運命の規定を理知的に把握して実行するのではなく、運命によって体内から抗いがたく突き動かされるのである (208; vgl. 86)。
- ③運命は人間を諸集団に区分し、その区別は血において同族と異族との区別となって人間に伝わる。「血を通して私たちは疎遠か親密かを感じる」(191f.)。人間がさまざまな国民に分かれていること、自国の人々や風景などに愛着を覚えること、敵対的な勢力に対抗心や敵愾心を抱くこと、自国の側に立って敵対勢力と戦うこと、こういったことすべては、人間が血を介して運命の規定を受け取り、それに従った結果なのである。

主体性の根源を人間、血、運命へと遡っていくユンガー的世界観の中では、たとえ実質的には祖国奉仕者の共同体であっても血の共同体であり、ひいては「運命共同体」である (vgl. 113, 186)。そこでは、祖国に奉仕することは

5) Vgl. Friedrich Georg Jünger: Maximilian von Spee. In: Die Unvergessenen (Anm. 4), S. 335-344; Erich Raeder: Der Kreuzerkrieg in den ausländischen Gewässern. Band 1. Das Kreuzergeschwader. Berlin (E. S. Mittler & Sohn) 1922, S. 280-314; Hans Pochhammer: Graf Spees letzte Fahrt. Leipzig (Koehler & Amelang) 1924¹⁰, S. 142-162; E・ホイット (実末謙訳): 潰滅 (フジ出版社) 1969, 257-289頁。

6) Vgl. Ernst Jünger: Krieg als inneres Erlebnis. Schriften zum Ersten Weltkrieg. Hrsg. von Helmut Kiesel. Stuttgart (Klett-Cotta) 2016, S. 426.

人間の合理的判断の結果ではなく血の作用の現れとして、より根源的には血を動かす運命の力の表出として見られるからである。

とはいえ実質的に重視しているのがもっぱら祖国奉仕であることは、同時代のナショナリズムに対するユンガーの態度決定に重大な影響を及ぼしている。それは身体的特徴から「血の共通性」を確かめようとする生物学的人種主義への拒絶となって現れるのである。「私たちは、血が純粋さよりも業績によって自己を証明すると信じる点で、人種を崇拜するあのセクトとは異なる」(371)。血の共同体の構成員であることは、運命の規定としての祖国奉仕(「業績」)によってのみ証明されるのであって(193; vgl. 248, 371), 調査や実験によって「血の純粋さ」を確認したり創出したりすることができるという人種主義の想定や努力は、誤謬として斥けられなければならない(194)。

血の純粋さだ、血の改良だ、血の良質な混淆だなどと言われるが、運命の偉大な力が伴うのでなければ血など無意味である。運命という試金石によってのみ血は価値を証明する。[…] それゆえ私たちは人種や血といった概念を悟性で裏づけようとする努力の一切を拒絶する。[…] 私たちは、化学を用いた反動、血液検査、頭骨パターンやアーリア的特徴が云々といった声に耳を貸さない。(193)

複雑な人種混淆の歴史を経てきた上に、領土の伸縮や住民移動が繰り返された結果、ドイツは成立当初から多人種・多民族の国家となっていた。そのようなドイツで個々人の身体的特徴からその国民帰属を判別しようとする考えをユンガーは批判し、そうした考えがいずれ「常軌を逸して、狼藉や馬鹿げたこだわりに帰着するにちがいない」(193)と言う。「アーリア的特徴」を持たない祖国奉仕者を国民から排除したり、祖国奉仕の経歴を問わず「アーリア的特徴」を持つ外国人をドイツ国民に組み入れたりすることを、彼は意図も許容もしなかった。

個々人の人種的特性に関するユンガーの無頓着は意図的なものであり、祖国奉仕者の共同体であるべき国民の枠組みを人種主義が解体してしまうという危惧に基づいていた(vgl. 194)。しかしナチ政権が誕生し生物学的人種主義が御用学問化すると、単なる無頓着は人種主義への対抗姿勢として不十分になった。

それゆえナチ体制成立後のユンガーは、人種混淆を積極的に肯定する立場を示すようになる。彼はそのための理論的土台を植物学者F・メルケンシュラーガー(1892-1968)から得る。メルケンシュラーガーは、ナチの御用人種学者となったH・ギュンター(1891-1968)の断固たる批判者であり、ユ

ンガーに献呈した著書の中で、①欧州諸民族は複雑な人種混淆（「混血化」）の歴史を辿ってきた上、今後も永続的な人種変容を続けること、②ギュンターが称揚する「北方人種」のみから成る「純粋人種」など存在しないこと、③現在のドイツ民族も人種混淆の産物であり、憎悪される「セム族の血」さえドイツ民族の本質の一つとなっていること、⁷⁾ ④仮にドイツ民族が巷間で誉めそやされる「純粋人種」であったとすれば、ドイツ民族の文化的業績は途方もなく貧弱なものになっていたこと、⑤ギュンターが警鐘を鳴らす「混血化による北方人種要素の減少」は、北方人種要素の優秀性どころか（時代に適応できない）劣等性を示しているのものであって、むしろ混血化過程の中でこそ北方人種要素は後世へと保存されうることなどを主張していた。⁸⁾ ナチ党の「職業倫理監督局」からメルケンシュラーガーとの関わりを尋問されたユンガーは、彼の人種論を「最上のドイツの伝統」を受け継ぐものとして高く評価していることを伝えた。⁹⁾

ユンガーの上のような思考の行路を貫くのは、縷々述べてきたように、ドイツ国民は祖国奉仕者の共同体（であるべき）だという考えであり、この基準を満たす者に対してその血統の内実を不問とする姿勢である。血の共通性の重要性を強調するにもかかわらず、その国民像の枠は閉じ切られていないのである。こうした国民理解に示される開放的姿勢を、ユンガーはそれ自体ドイツ的なものとして捉え直し、新たなドイツ国民像を提示している。次節でそれについて見ることにしよう。

2 性格の共同体としてのドイツ国民

血と運命の共同体論ののちに、ユンガーはドイツ国民に「性格の共同体」という第三の別名を与えている。ドイツ国民は共通性格によって結ばれた人々（であるべき）だと考えるのである。この「ドイツ人の性格」について彼は詳しく説明しているわけではないが、解釈を交えつつその考えを再構成することにしたい。

7) Friedrich Merkenschlager: Rassensonderung, Rassenmischung, Rassenwanderung. Berlin (Waldemar Hoffmann Verlag) 1931, S. 28f., 36.

8) Fritz Merkenschlager: Götter, Helden und Günther. Eine Abwehr der Güntherschen Rassenkunde. Nürnberg (Lorenz Spindler) 1927, S. 17. 「人種間の優劣などない。どんな人種も、[それぞれの] 環境条件下にあった種々の可能性の神々しい現実化である」(S. 36) というメルケンシュラーガーの発言は、次節で見る個性尊重・多様性志向の民としてのドイツ国民理解と軌を一にしている。

9) Vgl. Ernst Jünger / Carl Schmitt: Briefe 1930-1983. Hrsg. von Helmuth Kiesel. Stuttgart (Klett-Cotta) 1999, S. 34f. [山本尤訳：ユンガー＝シュミット往復書簡（法政大学出版局）2005, 29, 34頁]

ユンガーはナショナリスト期の文書の中で、粘り強さや秩序志向など、ドイツ人らしさを構成する要素を色々と挙げているが (vgl. 98, 183, 278), 国民像の構成要素として特に注目されるのは個性愛と多様性志向である。彼はこの個性愛・多様性志向の基礎にあるドイツ人の統一的な世界把握を「美德」として肯定的に評価するとともに、この美德を活かしきれないドイツ人の未熟さを意識する。しかしこの美德を体現する実例を見出し、ドイツ国民の模範像として提示する。これらの点について順に見ていくことにしよう。

ユンガーは「ドイツ人の並外れた特徴」として、人をその個別性において把握したいという願望があることを指摘している (385f. [14-16])。ドイツ人は人と接するとき、他の誰とも同じではないその人らしさに注目し、そこに価値を見るのであり、そうした個性愛の強さは、「なかならず、どんな動物でもその特別の名前と特別の性格を持つドイツの動物譚にも表れている」 (386 [16])。

ユンガーはさらに、このような個性愛の根底には「ドイツ人の気質」があると言う (vgl. 386 [16])。そう言って彼が念頭に置いているのは、万物の根源をなす神的な力の存在を信じ、存在するものすべてに神性の片鱗を見出し、共属意識を抱くような宗教的な感性のことだと考えられる。この感性の代表者が前節で触れた神学教授グレゴリーである。グレゴリーは、万物の根源に神の実在を見るとともに、この神の作品たる万物を、神性を分有する「同胞」として見ていた (CRG, 125 [49])。¹⁰⁾ ユンガーは、グレゴリーが日頃人々の行き交う雑踏に身を置くのを好んだという逸話に言及し、彼がそうしたのは市井の人々に神性の輝きを見て感動していたからで、「こうした特徴の中に何か非常にドイツ人らしい要素が隠されているように思える」 (PP, 122 [42]) と述べている。¹¹⁾

万物の根源に神の統一を見て取るドイツ人の感性が個性愛に繋がっていく理由は、生けるものはみな、神的な根源が孕む潜在的な発展可能性を汲み尽くすべく、それぞれの個性を発揮する使命を帯びていると信じるからである。¹²⁾ ユンガーはこのような信仰を「理念」の光と「スペクトル」との関係に準える。「理念の眩い白色光」は、人間共同体という「プリズム的媒質」に入射すると、砕け散って色とりどりのスペクトルと化す。この分散は避けら

10) この関連で、ユンガーが「多種多様な国民的現象の背後に一つの巨大な運動を見ていたゲーテのような人物の世界市民主義」(PP, 142) を評価していることも注目される。

11) ユンガー自身がそうした感性の持ち主であった (vgl. Ernst Jünger: Sämtliche Werke. Band 11. Stuttgart (Klett-Cotta) 2015, S. 91, 99.)。また彼は、こうした感性の所在を当時ドイツで流行していた「魔術的現実主義」の絵画動向の内にも認めている (PP, 300)。

12) PP, 282; vgl. PP, 184, 323, 390 [23]; Ernst Jünger: Sämtliche Werke. Band 18. Stuttgart (Klett-Cotta) 2015, S. 61.

れないことであるだけでなく、必要なことでもある」(139)。つまり神的な根源は、その一体性を保ったままこの世に現象することはできず、分裂して多種多様なものとして現象する。無色の太陽光が自らのうちに含むさまざまな色の光を、分散によって初めて明らかにするのと同じように、神的な根源は多種多様なものに分裂することでのみ、自らの内実を発揮することができる。それゆえそこで生じた多種多様なものは、どれほどちっぽけなものであっても「全体の観点から見れば、同じように欠かせない存在である」し、神の根源の内実を十全に展開するために、少しでも多くの色調が生み出されなければならない(140)。

このようにして個性愛と多様性志向へと繋がっていく世界の一体的把握を、ユンガーはドイツ人の「美德」として肯定的に評価する(vgl. PP, 390[22])。しかしその一方で、この美德がドイツ人の「弱点」にもなってきたと言い、ドイツ人の歴史はその証左の宝庫だと言う(390, 393 [22, 70])。意味の取りにくい発言だが、ラディカルな統一志向を持ちながら、まさにそれがラディカルであるために、現実の行動や秩序として首尾よく形式化することができないもどかしさを言うものと考えられる。たとえば中世盛期以降のドイツ(王)が、諸民族包摂的なキリスト教大帝国という理想の実現に向けて邁進し、かえって諸侯の分裂と割拠という現実に苦しめられたように、ドイツ史には高邁な統一理念と自己分裂的な現実との甚だしい乖離が認められるのである。

しかしユンガーは、美德を持って余すドイツ人の不遇や未熟を憂いながらも、グレゴリーの人物像に触れ、そこに希望を見出すことができた。彼にとってグレゴリーは、ドイツ人の美德をごく自然に発揮することができる人物でもあったからである。そして彼はグレゴリーのこのような能力を、東西の欧州人の気質の稀有な調和的総合として評価している。以下この点について見ていくことにしよう。

はじめに確認しておきたいのは、深い精神性を持ちながらそれを首尾よく表現できないドイツ人というイメージは、「東方の隣人」であるロシア人についての、次のようなイメージの影響下にあったことである。①ロシア人は他者の中に敵ではなく同胞を認め、他者との分断ではなく合一を望む。なぜならロシア人の世界観においては我も汝も根本的には一体だからである。②しかしロシア人は魂のそのような深みや温かみを適切に表現することができない。熱情を向ける方向を定めることができず、自己破壊的な暴走に陥ったり、理解されず恐れられたりする。¹³⁾ 第一次世界大戦前後の時期、このよう

13) W・シューバルト(駒井義昭訳): ヨーロッパと東方の魂(富士書店)1985, 24頁; N・ベルジャーエフ(斎藤栄治訳): ドストエフスキーの世界観(白水社)1978, 19-23, 194-198頁参照。

なロシア人とドイツ人との「精神的同族性」が取り沙汰されており、¹⁴⁾ ユンガーもその影響下にあった (vgl. CRG, 124 [46]; PP, 571 [99f.])。

しかしグレゴリーは、ロシア的な魂の深みや温かみを持つだけでなく、ラテン系諸国民の特質と目される「実践的な性質」(CRG, 124 [46]) も備えていた。彼はこのラテン的な現実即応力のおかげで、「信仰と実生活上の様式とのあいだの密接な結びつき」(123 [45]) を作り出し、自らの信念を難なく表現することができた。たとえば彼は、身分や階級や民族など一切の垣根を越えて他者への深い同胞感情を抱き、この同胞感情を「そうした行動が大学教授に相応しいことであるのか否か」が問題となりうるような場面においてすら、躊躇うことなく博愛的な行動として表現することができたのである (124 [47ff.])。

信仰や信念といった「心の中の現実」に忠実であり続けながら、外部の「現実と見事に折り合うのを常とする」(124 [46]) グレゴリーの深みと軽やかさのうちに、ユンガーは東西の隣人たちの特質の調和的結合を見、それをドイツ国民の模範像として提示する。

自分の魂の動きに客観的に明確な表現を与えることもできるこうした性格の持ち主たちは、まさに私たちドイツ人にとって多大な教育的価値がある。一方で私たちは、〔西方の隣人たちの〕「ラテン的明晰さ」をさんざん褒め称えるにもかかわらず、この明晰さによって自分の人格的欠損が非難されたかのようなショックを受ける。他方で私たちは、東方の隣人たちに固有の、強力ではあるが方向の定まらない魂の力が放つ輝きによって不安にさせられ、かつ魅了されもする。〔…〕私たちは心の中の現実を外部の現実にくまなく合わせることに失敗しがちであり、だからこそグレゴリー教授のような人々に、大いにほっとさせられるのだ。(124 [47])

ドイツ国民は、自らの理想を現実の中で適切に表現することが不得手であるため、他者の理解を得られなかったり、フラストレーションから現実を敵視・無視したり、あるいは理想を見失って現実に流されるままになったりといった極端に陥りがちであり、それゆえ精神性の近いロシア的「東方の隣人たち」に共感を覚えもする。しかし最も望ましいのは、扱いにくい熱情を保つ

14) Vgl. Heinrich August Winkler: Die Spuren schrecken. Putins deutsche Verteidiger wissen nicht, in welcher Tradition sie stehen. In: Der Spiegel. Nr. 16, 2014, S. 28-29, hier S. 29; J・F・ノイロール (山崎・村田訳): 第三帝国の神話 ―ナチズムの精神史 (未来社) 2008, 276-277頁。

たまま明晰で軽やかな「ラテン的」実践力を身につけ、自己を表現することである。「内面と外面の統一を維持する力を持った一個の人間」（128〔58〕）グレゴリーは、そうした理想的ドイツ国民像を体現する人物なのであった。

以上を踏まえると、性格の共同体としてのドイツ国民とは、万有の根源をなす神的統一体の実在を信じ、この信仰から全体の多様性の増大を志向し、それゆえすべての異質な他者を尊重することができる、共生能力の高い人々だということになろう。その模範例がグレゴリーであるが、ユンガー自身が、多層的な出自を持つグレゴリーをドイツ国民の模範として受け入れることによって、ドイツ国民の包摂的態度を例示しようとした、と見ることもできる。

ユンガーの思い描くドイツ国民とは、命を賭しての祖国奉仕者集団であり、なおかつ根源的な同胞感情を持つがゆえに多様な人々を受け入れることができる包摂的な人間集団である。彼にとってそれは人間の美徳を高度に体现する理想的な人々なのだが、そうした矜持は同時代の一般的な差別的動向と結合して、理想に合致しないと見なした人間集団の排除論として現れることにもなった。次節でそれについて見ることにしよう。

3 非ドイツ国民のイメージ―黒人、ポーランド人、ユダヤ人

上で、ユンガーがその国民論において身体的特徴から国民帰属を判断する同時代の生物学的人種主義を拒絶し（第一節）、また他者尊重的で多様性志向の民としての理想的ドイツ国民像を抱いていたことを確認した（第二節）。しかしその一方で彼にはそうした態度と相容れないような排除志向の差別的発言も見られる。「黒人」「ポーランド人」「ユダヤ人」を、ドイツ国民には含まれない異質な存在として名指しているのである。そしてそれにもかかわらず、これらの排除論は上に見てきた彼の国民論の延長上にあり、その国民思想の一貫性を傍証するものとして理解されうる。順に確認しよう。

まず黒人排除論についてである。第一節でユンガーの運命共同体概念について見たが、彼はこの言葉が巷間では別の意味で、つまり、ある時ある場所に居合わせてしまったがために否応なしに苦難を共有することになった人々を指すために用いられており、この語法は間違っていると批判する。というのもこの意味での「運命共同体には、ドイツで戦争勃発の知らせに面食い、そのまま私たちの苦難の道に引き摺り込まれてパン券から〔代用食品としての〕カブラまで経験する羽目になった黒人も所属することになる」（PP, 127）からである。帝政期ドイツには植民地アフリカ出身の黒人住民が数千人規模で滞在していたとされるが、これらの人々は第一次世界大戦の勃発で帰郷の機会を失い、ドイツ国民の四年余りの厳しい銃後生活をともに経験せざるをえなかった。しかしそうした人々をドイツ国民として受け入れるとい

う考えはユンガーにはなかった。

この排除論は、生物学的人種主義に対する批判的姿勢と相反するように見えるものの、なお彼の国民思想と合致している。というのもここで黒人という言葉は、祖国の命運への情熱的関心を持たない、巻き込まれ型の戦争参加者たちを象徴するものとして用いられているからである。むろん戦中の過酷な国内生活を耐え抜くことも決死の祖国奉仕でありうるが、しかし運命が血を介して人間にもたらす「深い帰属感の幸せな感情」(193)を伴っているのであれば、国民帰属の認定基準を満たすものとは認められないのである。¹⁵⁾

同様の理由で排除対象になっていると考えられるのがポーランド人である。ユンガーは、同時代の農本主義的ナショナリズム団体「アルタマーネン」¹⁶⁾の活動に触れ、この団体が課題として掲げる「ドイツからのポーランド人労働者の追放」は「具体的な国民的課題」の一つだと述べている(250)。歴史的経緯からドイツにはポーランド系の人々が多く暮らしていたが、ここでユンガーが、ドイツ国籍を持ちドイツ社会に同化したポーランド人の国籍剥奪や追放を訴えているとは考えにくい。¹⁷⁾アルタマーネンに言及する文脈上、彼が攻撃しているのは季節労働者として東部農村地域にやってくる外国籍ポーランド人であり、私的な事情からドイツでの一時的就労を選んだ外国人労働者には命懸けの祖国奉仕を期待できないという意味で、その「追放」を訴えていると考えられる。そう考えるなら、ポーランド人労働者排除論もなお彼の国民論との整合性を保っていると言えるであろう。ただしここでは単に国民帰属を認めないと言っているのではなく、放逐を訴えているという点で、排除姿勢は急進化している。

最も攻撃的なのがユダヤ人排除論である。ユンガーはもともと同時代の反ユダヤ主義への関心も共感も欠いており、国内外のユダヤ人の脅威を説く風潮に対しては、自分に自信のないドイツ人が取るに足りない勢力を無闇に恐れているだけだとして、冷笑的なまなざしを向けていた(295, 504f., 544f.,

15) この関連で、ドイツ領東アフリカで戦闘に従事させられた数万の黒人についての判断が注目されるが、これについてユンガーは何も語っていない。

16) Vgl. Stefan Brauckmann: Historische Hintergründe. Die Artamanenbewegung in der Weimarer Republik. In: Braune Ökologen. Hintergründe und Strukturen am Beispiel Mecklenburg-Vorpommerns. Hrsg. von der Heinrich-Böll-Stiftung und der Heinrich-Böll-Stiftung Mecklenburg-Vorpommern. 2012, S. 39-50.

17) 理由としてさしあたり次の三点を挙げたい。①ユンガーは次の戦争に向けて労働者大衆(とりわけ工場労働者)の国民的統合を推進することを企図しており、そこにはポーランド系ドイツ人が多く含まれていたこと。②第一次世界大戦の戦場でポーランド系の出自を持つ兵士たちと親しく交際していたこと。③ニーチェやクラウゼヴィッツなど、学問や軍のエリート社会に進出したポーランド系ドイツ人を、ドイツ精神の精華として高く評価していたこと。

590)。しかしそうした態度は周辺のナショナリストから「ユダヤのお仲間」と揶揄される結果を招いた。それは彼にとって不本意であつたらしく、「私はこの人種が破壊的な性質を持つことを認めるもの」であつて、「ユダヤのお仲間だなどというのはありえない」とした上で (543f.), 「ユダヤ人問題」に関する自身の立場を説明した。

その主張の一部をまとめると以下ようになる。①私はユダヤ人が「危険で病気をもたらし破壊的な存在」であることを承知しているが、しかしユダヤ人を罵ったり身体的危害を加えたりすることには何の関心もない。②ユダヤ人の危険性は、自らのユダヤ性を否定してドイツ人に同化し、さらにはドイツ人の国民的自意識をも掘り崩そうとする点にある。③問題の根本的解決のために必要なことは、ドイツ人が国民的自意識を再獲得することである。それはドイツ人が「どんなに小さくどんなに目立たない病原菌でも耐えられなくなるほどの高温に向かつていくこと」であり、そうすることで「異質なものは、火山島に打ち上げられた魚のごとく徹底的な無力に陥る」であろう (544, vgl. 591)。

ユダヤ人を病原菌に準え、ドイツ人の国民的覚醒の熱気がユダヤ人を焼けるような苦しみによって無力化すると予告しているのは、きわめて暴力的であり不吉である。しかしユンガーは、歴然たる祖国奉仕の経歴を持つユダヤ系の在郷軍人や戦没兵士に対しては、敬意を公にし、その国民帰属を疑わなかった。¹⁸⁾ このことから推測されるのは、彼が敵視しているのはドイツの全ユダヤ人ではなく、特定のユダヤ人なのではないかということである。そしてその関連で注目されるのが、「ドイツという名の祖国が存在するという命題」を「ユダヤ人はつねづね否定しようと努めている」という非難であり (591), またそのようなユダヤ人のことを「文明ユダヤ人」や「同化ユダヤ人」と呼んだり、「精神の偉大な自立宣言によつてもたらされた」「自由主義の息子」と評したりしていることである (590)。

これらの発言から、彼がユダヤ人を攻撃するときに念頭に置いているのは、個人を束縛する団体思想に挑戦する、脱宗教化し同化したユダヤ系知識人 (マルクスやルクセンブルクなど) であったと推測される。因習の桎梏からの全個人の解放を目指す彼らは、神であれ王であれ、祖国であれ国民であれ、個人の上位に立つ既存の権威の一切を否定する (vgl. 324, 334, 475, 591)。そのような彼らが、(脱宗教化し同化しているがゆえに) ユダヤ系の出自を示

18) Vgl. Ernst Jünger: Sämtliche Werke. Band 3. Stuttgart (Klett-Cotta) 2015, S. 167f. ユンガーは、第一次世界大戦に出征し戦死したユダヤ系の政治家 L・フランク (1874-1914) を、その祖国奉仕の経歴を評価してドイツ国民の「選良」に数え入れている。Ernst Jünger (Hrsg.): Die Unvergessenen (Anm. 4), S. 397; PP, 392; vgl. PP. 574f. [103]

すことなくドイツ国民の一員として言論活動を行い、その反権威的・反愛国的な思考をドイツ国民に浸透させてきたことで、ドイツ人の国民的自覚（祖国や国民といった、個人よりも上位の権威への信仰）はますます掘り崩されていった。このような特殊かつ限定的な意味でユダヤ人は「ドイツ人にとって伝染性の、それゆえ危険な存在」（592）なのであり、この意味でのユダヤ人にユンガーが国民帰属を認めないのは、上で見た「黒人」や「ポーランド人」以上に当然ということになるのであろう。

この関連で確認しておきたいのは、国民帰属を認めないことは、国籍剥奪の要求や共生の完全拒否と同じではないということである。ユンガーは、将来的にユダヤ人は「ドイツではユダヤ人であるか、それとも存在しないかを選ばなくてはならない」と言い、この「最後の二者択一」に向けて「はっきりと自分たちに固有の掟に従う勢力として姿を現す」ことを求める（591）。つまりユンガーは、ユダヤ人が同化の努力を放棄し、ユダヤ性を明示するのであれば、無力な少数派としてドイツに暮らすことを認める（ただしユダヤ的素性を隠し続ける場合は、ドイツで生きることを認めない）と言うのである。¹⁹⁾

しかもユダヤ人に対するこの酷薄な宣告は、彼の思考の中では、個性愛と多様性志向の民としてのドイツ国民理解とも矛盾するものではなかった。彼はこう述べているからである。「ユダヤ人の永続的な障地はただ一つ、ソロモンの神殿しかない。私はどんな民族に対してもその本物の明白な特性を歓迎せずにはられない。したがってユダヤ教正統派信仰こそ私が歓迎するものである」（544）。当時大半のユダヤ系ドイツ国民にとって疎遠なものでしかなかったであろう正統派信仰を、ユダヤ人の本来の姿として押しつけがましくも「歓迎する」点で、ユンガーはその思想的統一性を保っていたのである。

おわりに

以上の考察をもとに、ユンガーのドイツ国民像の内容を素描することををもって、本稿の締めくくりとしたい。血と運命の共同体論が示すように、彼が

19) ドイツにおける反ユダヤ主義には、①ユダヤ人に棄教や改宗などを通じたドイツ社会への同化を求める（ユダヤ教徒をユダヤ人と見なす）もの、②同化は不可能であり、棲み分けのためにむしろユダヤ的特性の明示を求める（ユダヤ人を信仰内容とは無関係に「セム人種」と見なす）もの、③同化も共生も不可能と考えてユダヤ人の排除（国籍剥奪、追放、抹殺）を図るものの三タイプがあったとすれば、ユンガーの反ユダヤ主義は②のタイプに分類できる。ゲイの表現を借りれば、①のタイプが、「自分たちの特徴を維持し、そしてまた誇示する」集団としてユダヤ人を嫌悪したのに対し、②のタイプは、「あらゆる境界線を消し去ろうと懸命に努力していた」集団としてユダヤ人を恐れ憎んだ。ピーター・ゲイ（河内恵子訳）：ドイツの中のユダヤ—モダニスト文化の光と影（思索社）1987、21頁参照。

イメージする理想のドイツ国民とは、死をも厭わない祖国奉仕者の集団である。この祖国奉仕は決定的な基準であり、それが満たされれば、血統などの出自における他者性を不問とするような大らかさもある。

この大らかさを積極的に理念化したものと考えられるのが性格の共同体論である。ここでドイツ国民は、異質な他者との根源的同族性を信じ、その個性を尊重し、社会の多様性を高めることができる、共生能力の高い包摂的な人間集団としてイメージされる。

とはいえこの大らかな態度は決死の祖国奉仕という前提条件を満たす者だけに示されるものであって、非愛国的と見なされた集団がドイツ国民として迎え入れられることはない。しかしまた、この排除姿勢は必ずしもつねに追放を意図するものではなく、ユダヤ人への態度に示されるように、異質な集団としての個性を明示するかぎりで共生を認めるものでもあった。個性尊重的・多様性志向の民としてのドイツ国民像は、このような形の排除論を内包しながら、その一貫性を保持していたのである。

なお本稿で概観した祖国奉仕者集団としてのドイツ国民像は、その後大幅に後景化する。このことは、ユンガー自身にとって（身体上の安全にもかかわらず）第一次世界大戦よりもはるかに過酷なものとなった第二次世界大戦の経験の中で、国民像の主たる形成動因になっていた軍人的なものへの過大な評価姿勢が失われ、ときに嫌悪感さえ抱かれるようになることと関連している。またそれと並行するように、非軍人的な人々に対する不当な軽蔑もなくなり、弱者への共感的なまなざしが開かれる。ユンガー自身のそうした性質変化や、それを促した時代状況の激変の中で、ドイツ国民や非ドイツ国民の捉え方がどのように変化していくのかについては、別稿で取り組みたい。

Das Bild der Deutschen in Ernst Jüngers nationalistischem Denken

Toshihiko NOGAMI

In diesem Beitrag wird Ernst Jüngers Bild der Deutschen anhand seiner nationalistischen Texte untersucht. Die bisherige Forschung zeigt, dass sein Deutschenbild einerseits als etwas verstanden werden kann, das auf ethnischen, „objektiven“ Indikatoren wie „Blut“, andererseits als etwas, das auf subjektiven Indikatoren wie „Gemeinschaftsgefühl“ beruht. Was genau „Blut“ und „Gemeinschaftsgefühl“ bei Jünger bedeuten, und wie sie sich zueinander verhalten, ist jedoch noch nicht ausführlich behandelt worden.

Hier werden die folgenden Thesen aufgestellt: (1) In Jüngers Denken sind das Blut und das Gemeinschaftsgefühl fast identisch: Patriotismus ist bei Jünger „das Blut“, der Stoff, der eine Nation zusammenhält. Was bei der Anerkennung der nationalen Zugehörigkeit entscheidend ist, ist nicht die Abstammung, sondern der Patriotismus. (2) Diese Nicht-Exklusivität der Mitgliederschaft formt einen weiteren Aspekt in Jüngers Bild der Deutschen: eine inklusive Nation, die die Fremden respektiert. (3) Diese Offenheit der Deutschen wird jedoch nur denjenigen gezeigt, die als patriotisch Deutschland gegenüber anerkannt werden.

Um diese Thesen zu überprüfen, werden hier drei Bezeichnungen der Deutschen bei Jünger analysiert: Blut-, Schicksals- und Charaktergemeinschaft. Im Anschluss wird seine Beschreibung derjenigen analysiert, die von den Deutschen ausgeschlossen sind.

(1) *Blut- und Schicksalsgemeinschaft*. Obwohl Jünger behauptet, dass die „Gemeinsamkeit des Blutes“ für die nationale Zugehörigkeit ausschlaggebend ist, betrachtet er die Deutschland-Patrioten unabhängig von ihrer Abstammung als Mitglieder der deutschen Nation. Dementsprechend lehnt er die zeitgenössischen biologischen Rassenlehren ab, die versuchen, die „Reinheit des Blutes“ anhand von körperlichen Merkmalen zu bestimmen. Jüngers Bild der Deutschen ist also nicht so exklusiv, wie es scheint, sondern eher inklusiv. Dass er die deutsche Nation dennoch als Blut- und als Schicksalsgemeinschaft bezeichnet, liegt in seiner Weltanschauung begründet: Für ihn ist Patriotismus eine Wirkung des Blutes, und was dieses Blut wirken lässt, sind die „gewaltigen und zwingenden Strömungen unpersönlicher Kräfte“ des Schicksals.

(2) *Charaktergemeinschaft*. Jünger diskutiert darüber hinaus die deutsche Nation als eine Charaktergemeinschaft, bei der die Offenheit gegenüber Anderen ein gemeinsamer Charakterzug ist. Er schreibt den Deutschen den Glauben zu, dass alle Menschen einer göttlichen Ur-Einheit entstammen und die Aufgabe haben, ihre Eigenschaften zu entwickeln und die Vielfalt der menschlichen Gesellschaft zu vergrößern, damit sich das Potenzial der Ur-Einheit zur Gänze entfalten kann. Aufgrund dieser Überzeugung seien die Deutschen in der Lage, Anderen gegenüber offen und integrativ zu sein.

(3) *Haltung gegenüber Nicht-Deutschen*. Jünger schließt von den Deutschen die typischen Diskriminierungsoffer des damaligen Rechtsnationalismus (Schwarze, Polen und Juden) aus. Der Grund dafür ist, dass Jünger diese Menschen als unpatriotisch Deutschland gegenüber ansieht. Doch obwohl er diese Menschen zwar nicht als Deutsche anerkennt, ist er auch nicht der Meinung, dass sie unbedingt aus Deutschland vertrieben werden müssen. Auch wenn sie nicht patriotisch sind, so Jünger, würden die Deutschen gerne mit ihnen leben, solange sie ihre eigene ethnische Besonderheit zum Ausdruck bringen. In dieser eingeschränkten Haltung gegenüber dem Zusammenleben hält Jünger sein integratives Deutschenbild aufrecht.

Zusammenfassung. Für Jünger sind die Deutschen in erster Linie eine patriotische Gemeinschaft. Solange man patriotisch ist, ist die Abstammung unerheblich. Diese Großzügigkeit ist die Grundlage für sein Bild von den Deutschen, die die Eigenschaften der Anderen respektieren und auf Integration ausgerichtet sind. Wer nicht als patriotisch gilt, wird nicht als Mitglied der Deutschen anerkannt, seine Eigenschaften werden dennoch respektiert.